

研究者名:和歌山大学教授 中島 敦司ほか1名

研究名:水害や土砂災害頻発地域における神社立地の災害安全性の評価

- 地道な調査をしっかりと行ったことを高く評価します。

なぜこのような災害に対して安全な立地になったのかを更に解明できることを期待します。仮説として災害が起きる度により安全な立地に移動したのではないかとということが考えられていますが、実証できると面白いと思います。集落の立地との関係もわかると面白そうだと感じました。

ご指摘の「仮説として災害が起きる度により安全な立地に移動したのではないか」について、東日本大震災の津波浸水線と神社の関係を比較した研究の反論として一部では既に指摘されていたもので、内陸での浸水でも同様の可能性を考え、文献や聞き取りで調べました。結果は、一部ではYESだったのですが、数が多いわけではなく、むしろ最初から安全側にあったとみなす方が適切な神社の方が多く、ご指摘の仮説を明確にすることはできませんでした。土砂災害になると、さらに災害で遷座させた神社の情報は少なくなりました。一方では、清めのため、あえて浸水する位置に造影し、浸水しても同じ位置に再建させる神社の情報も散見されました。世界遺産の熊野本宮大社は、記録では明治の大水害で遷座したと記録されているものの、清めを前提にしていたと地元の一部では伝承されています。既存研究や本研究のように、割合だけをベースに評価してしまうと、これらの情報を見えにくくしてしまうことは課題だと考えています。今後の課題だと受け止めています。

また、集落との位置関係は、現在、検討中です。集落内の位置関係についてですが、紀伊半島の山間集落では、厳島神社、金毘羅神社、愛宕神社、秋葉神社、非伏見稲荷系の稲荷神社などは集落の北か西の前山の山頂に置かれることが多いのことはすぐに分かったのですが、そうでない案件も少なくなく、特定するにまでは至りませんでした。そこで、古い情報が多く残されている2地域（現みなべ町の旧南部川村、現有田川町の旧清水町）を手始めに、地形だけでなく寺や学校など他の機能との位置関係も含めて継続調査を行っています。結果は、まだ見えていませんが、例えば、現在は集落の中にある神社でも、かつては集落の外れにあったようで、集落の拡大とともに神社の方に拡大、近づいていったなどの簡単なことは分かりましたが、まだまだ先の話がありそうで、継続的に調べています。さらに、合祀と集落間の力関係のようなものにも興味を湧いてきましたので、江戸時代の集落の中で現在は廃村となっている集落と神社や跡地の情報も集めています。旧街道との位置関係も調べています。これも結果をみるまでに至っていませんが、経済力や産業構造の変化だけでなく、一部では、「等しく不便」の痛み分けを調整の手法に用いた旧山村社会の価値観が見えてくるなど、話はどんどん深みに入っていますが、非常に興味深く、これも発展研究として先に進めています。

- 神社立地の災害安全性は何を示しているのでしょうか。単にその立地の安全性の議論でしょうか。（それなら対象は何であっても構わないです）

ご指摘のように、神社の災害安全性が分かったことで、その集落の安全性が評価できるわけではありません。目的にも書きましたが、本研究の主題は、先人の土地選択に対し災害危険性をどのように見ていたのか？ということであり、同一の機能で広域比較するために、どこにでもあった神社を題材に取り上げたものでした。多くの神社は古くから立地してますので、先人の知恵の確からしさを評価する上で、好適な材料だということで、神社を対象にしたということです。なので、神社を賛美する目的の研究ではありませんでした。

- 主祭神の「意味」と「災害」との関係性は明確にできたのでしょうか。それが主題ではないのでしょうか。それが主題だとすると、そのことは「防災」とどう関連するのでしょうか。

ご指摘の主題にチャレンジした研究でしたが、期間内に明確にすることはできませんでした。その理由は、祭神が時代とともに変化していることと、祭神を決めた、あるいは途中で神替えした理由が政治的、経済的力関係の影響を受けているため、当初の祭神本来の意味が見えにくくなっている事例が混在しているためだと考えています。祭神の変化は追える限りで最初にまで遡るようにし、それを評価対象にしましたが、中には神替えの事実を把握せずに評価対象に含めてしまった可能性も否定できません。このことは、当初から想定されていたので、数を集めることで相殺しようと考え、このために、悉皆調査を目指したわけです。結果は、神替えや社会情勢のことまで相殺できたかどうかまで踏み込めませんでした。少なくとも、東日本大震災でセンセーショナルに研究発表された、スサノオが防災神として機能しているという話は肯定されなかったという傾向は、数を集めたことで明らかにできたと考えています。

なお、ご指摘の「防災」の件ですが、本研究の主題ではありませんでしたので報告では記載していませんでした。しかし、中には、類似研究の結果から、神社を避難所に活用する事例も出てきており、どこにでもある神社というものを防災のアイコン的に活用する展開はあり得る話だと考えています。

- 今回の神社の災害安全性についての研究を、今後どのような活用を予定しますでしょうか。

構想だけはいろいろ浮かぶのですが、情報の最も適切な活用法を提案できるまで内容を整理できていません。その一部として、行政と意見交換し、とっさの災害時に、津波や浸水害なら神社の上に、土砂災害なら神社の下に逃げろ、というような分かりやすい単純な話にできないか？あるいは、現在問題になっている産地開発型大規模太陽光発電の計画評価の指標に使えないかも、行政と検討中です。特に住民感情と住民セルフの安全性評価のアイコン的に使えないか？そんな話も検討中です。